

II 活動報告 ②

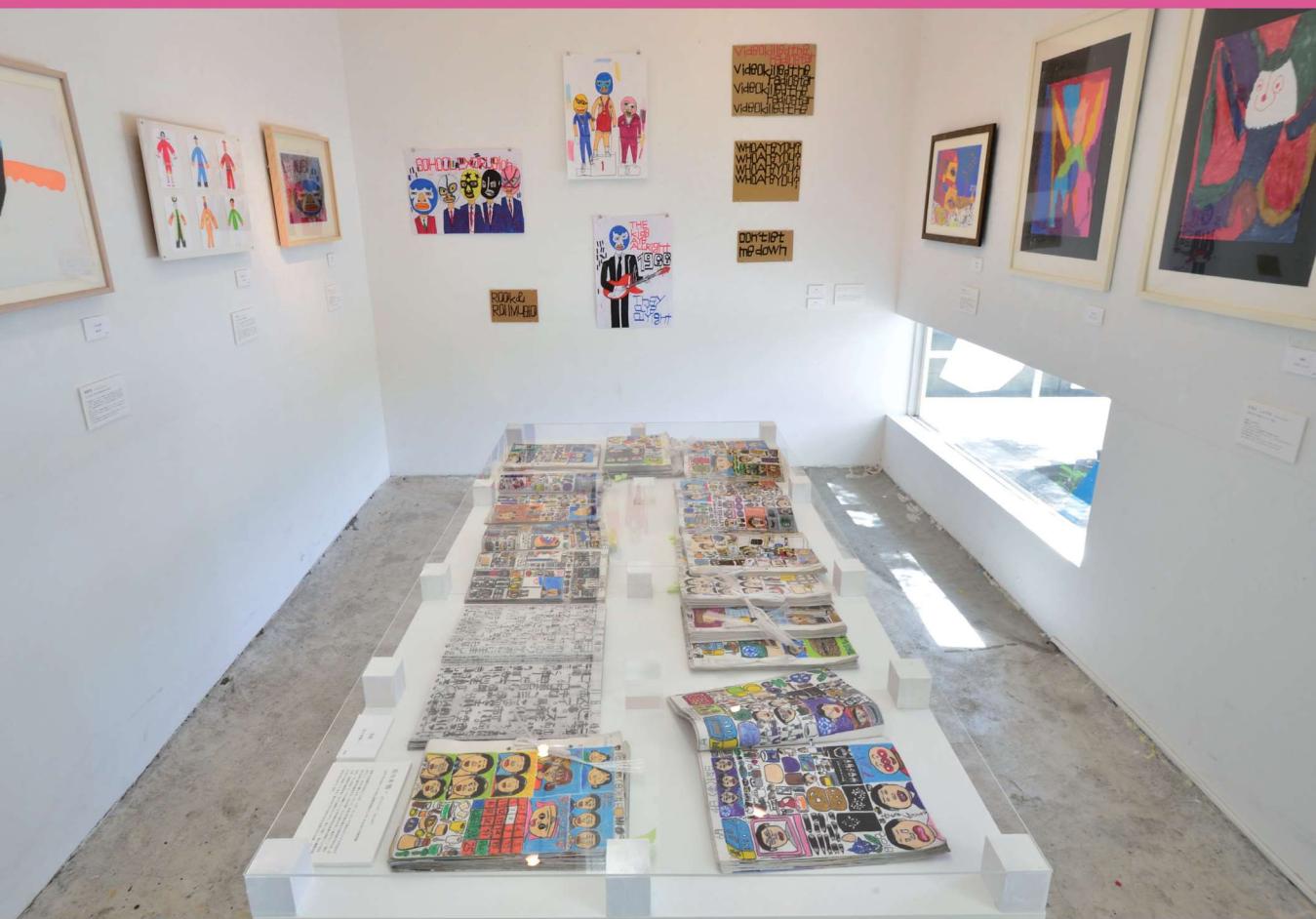
作品で広げる

TAMA P±O支援力UPプログラム

作品化の実践

↓作品展×3 + アーティストトーク×31





TAMAP±〇支援力UPプログラム
作品化の実践→作品展×3+アーティストトーク×31

まずは、作品として外へ

— それが、様々なつながりと変化をもたらす —

表現を作品として社会に広めることは、新しい価値観を創っていく第一歩です。何気ない表現にも人の心を動かすチカラがあり、その魅力を引き出し多くの人に届けることが、支援者の仕事ではないでしょうか。

アートセンター集では、その表現の普及と支援力の向上を目的に、4つの連動する展覧会（3つの作品展と1つのグッズ展）を計画。福祉施設等で表現活動を支援しているTAMAP±〇のメンバーが、月1回の定例会で各展覧会の企画会議を開き、協力委員であるアートディレクター中津川浩章さんのアドバイスを受けながら、県から主催を委ねられた「第7回埼玉県障害者アート企画展」を含め、すべての作品選考から展示・運営までを協働で行いました。

また、展覧会では、さらに表現の魅力を広め作家と来場者の交流をはかる、作家主体のライブイベントを開催。2つの作品展で行ったアーティストトークでは、延べ31名もの作家が大勢の来場者を前に作品に込めた想いや制作のエピソードなどを語りました。

表現を作品として社会に広めることは、新しい価値観を創っていく第一歩です。何気ない表現にも人の心を動かすチカラがあり、その魅力を引き出し多くの人に届けることが、支援者の仕事ではないでしょうか。

作品化の実践

目的

- ・日常の中の表現と向き合う
- ・様々な視点を交えて表現について考える
- ・展覧会や展示を通して表現を大切にする



TAMAP±〇のメンバーが、学びながら3つの作品展を開く支援力UPプログラム「作品化の実践」では、単に個人が表現を作品として展覧会で広める技術や知識を得るのではなく、目的にあるような「支援の意識」や、ポイントにあるような「アートの視点」を共に考え学び、それをメンバーが各施設等の職員と共有することで各現場の課題解決をはかる、支援者ネットワーク全体の「ボトムアップ」を目指しました。

企画会議メンバー構成

実施運営者	TAMAPメンバー 11～20名
アドバイザー	アートセンター集スタッフ 4名
アートディレクター	1名
コーディネーター	1名

STEP 1 作品の種を見つける

- ・一人ひとりの日常を表現として捉え大切にする。

POINT

キラッとする瞬間、ワクワクする瞬間を見逃さない!これって何?というモノも一つの表現。



毎日、持ってきて見せてくれる帰宅後に描いている絵日記。出来事がコマ割りでピッシリ描かれている。コメントもユーモラス。家には相当ストックされているみたい



いろんな色で描くことが好き。特にマーカーで描くレジ袋がお気に入り。家には袋がいっぱい。捨てないで集めてみた



あらゆるヒモ状の素材を楽しそうにギュッと結んではボイッ…こっそり溜めてみた。素材を用意したら作らなくなつたけど…

STEP 2 表現の魅力を共有

- ・創作の様子などを伝え
一人ひとりの表現の魅力を語り合う。
- ・各作品展のテーマや会場に合わせ
作品を選考。

POINT

一人ひとりの表現の魅力を様々な視点から探し合う。



その人にしか出せない、その人らしいモチーフ、色彩、質感、造形…リズム、時間、チカラが伝わる、想いがあらわれている表現…その魅力は様々



STEP ③ 見せ方の検討

- ・「どうしたら作品の魅力が伝わるのか」
アートディレクターを中心に
展示構成や展示方法を検討。
- ・作品と会場に合わせて額や展示台等を準備。
タイトル・作者名・説明等の
キャプションを作成。

POINT 一点一点大切にしながら来場者が作品
と向き合う空間をどう作るか考える。



何点をどう組み合わせどう展示するか、限られた展示空間で
どう配置するか、他の作品とのバランスは...
時にはタイトルや説明が表現を引き立てることもある



似顔絵の連作は画面に



軽やかな作品は上に



数で時間の積み重ねやエネルギーを伝える



数で個性や作風を伝える

すっしりとした綴りは平置きに



展示方法を変えて表現の幅を伝える

column アートの芽①

作品を発掘するための アートディレクター 中津川浩章

まずは、よく見ること。感じること。すぐに意味化しないこと。「違和感」を大事にすること。既成の知識や過去の体験だから結論づけないことです。それから次に、そこに何が表現されているのかを「読む」ことです。そして自分で感じたこと、見たこと、読みとった何かを、ゆっくりと言語化していきます。

そして言語化されたものをスタッフなど関係者と共有し対話していくことです。そうすることによって自分が感じたこと、考えていたことが対象化され、社会的な視線が育っていくことでしょう。作品に対する社会的な視線が育っていくと、自然に作品の意味や価値が自分の感性を通じてわかってきます。すると、展示する価値も的確に把握できるようになります。

また言うまでもなく、自分自身の感性を磨くことは大切です。いろいろな展覧会を見ること。たまには作品を購入してみたり。そうすることで審美眼を養い、作家をリスペクトし、作品の持つ客観的な魅力に気づくこと。そうしたことが障害者の作品理解に、また作品を介した対外的な人間関係においてもきっと役に立つでしょう。

UFU ❤ SAITAMA 土(ゼロ)キックオフ展

— 各施設から11名の作品をセレクト —

2016.9.1~9.11 @川口市・工房集



TAMAP土〇主催の第一弾。「12月の障害者アート企画展に行ってみたい!」と思つてもらえる展覧会を目指し、昨年までの企画展で連携を深めたメンバーが中心となって、各施設等から選出した作風の異なる11名の作品を紹介しました。

アーティストトークには、6名の作家が参加。初挑戦の作家も臆せず、普段とは違う表情を見せ、職員や家族を驚かせていました。また、初めて作品が売れた作家もいました。身近な人たちからの反響も多く、作家たちの今の様子やTAMAP土〇の活動を知つてもらう良い機会になりました。来場者の感想は→P70 来場者522人(アトリエ見学ツアーや葉っぱを描きます)、庭師長崎剛志さん協力73名、カフェ利用222人)



来場者数
522人

出展作家
11名

異なる視点をひとつに
+ 作品選考会 +

今年、県から主催を移して開催した「第7回埼玉県障害者アート企画展」では、TAMAP±〇メンバーと協力委員でもある美術の専門家たちが、福祉とアートの視点を交えて作品選考を行いました。

選考メンバー

TAMAP±〇メンバー13名
アートセンター集スタッフ4名
アートディレクター中津川浩章（美術家）
コーディネーター杉千種（con*tio）

小澤基弘（画家、埼玉大学教育学部教授）
酒井道久（彫刻家、元埼玉県立大学教授）
前山裕司（埼玉県立近代美術館学芸員）
内田幸男（埼玉県障害者福祉推進課）

POINT

福祉・美術・教育…異なる視点で作品の魅力を語り合う場が、「障害者アート」や「アート」を考える豊かな時間になる。

1. 県が平成21年から続けている県内の障害者を対象にした「表現活動状況調査」の調査票をもとに選考。



平成28年度調査票回答数425名

2. 選考委員が同じ持ち票数で投票。選考作品を約半数に。



3. 選んだ理由や作品の魅力を語り合い、作者を知る施設職員等は、作品の成り立ちや作者について解説。美術専門家の目と福祉現場の目、それぞれの視点を共有。



4. 最終的には展示予定数にあわせて数を絞り込み、出展作家を選出。





第7回埼玉県障害者アート企画展

UFU ❤ SAITAMA 土〇展

— 埼玉全域から多彩な表現が集結! —

2016.12/7~12/11 @さいたま市・埼玉県立近代美術館一般展示室1



表現活動に关心のなかつた作家の家族や施設職員が、作品として展示された表現を見て、目を輝かせたり喜び合つたり、施設利用者等の来場も多く、作家同士が交流する場面も多くみられました。来場者の感想は

↓ P75

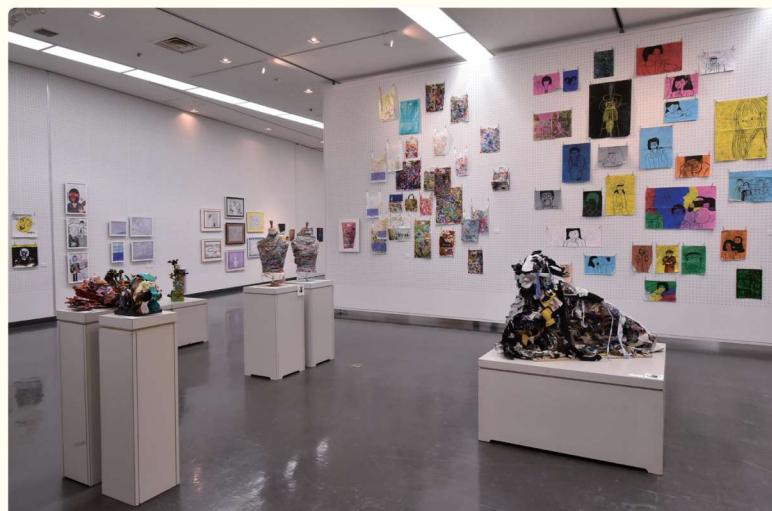
常連作家の新作から初めて世に出る作品まで多彩な表現が一堂に会し、埼玉県における表現活動の広がりが感じられる展覧会になりました。また、展覧会に向けて制作された力作もあれば、支援者が発掘した日々の表現の集積もあり、障害者アートの幅広さを伝えると共に「障害とは?」「アートとは?」といった本質的な課題を問う機会にもなりました。

埼玉が誇る「障害者アート」の祭典。初の民間主催で開催した今年度は、過去最多の425通の調査票から選出した83名・561点もの作品を紹介しました。

埼玉が誇る「障害者アート」の祭典。

は

→ P47
また、関連イベントとして障害者アートマネージメントセミナー「障害者アートの可能性について」を開催しました。詳細



出展作家

83名

来場者数
1313人

- 主催 埼玉県障害者アートネットワークTAMAP土〇、社会福祉法人みぬま福祉会
- 共催 埼玉県
- 後援 上尾市、春日部市、川口市、川口市教育委員会、川越市、行田市、熊谷市、鴻巣市、さいたま市、さいたま市社会福祉協議会、戸田市、新座市、東松山市、三郷市、吉川市、JR東日本大宮支社
- 協力 埼玉県立近代美術館、埼玉県アートフェスティバル実行委員会、con*tio、株式会社ジェイアイシー
- キュレーション 中津川浩章

開催に寄せて

アートディレクター 中津川浩章

作品集より転載

日本の障害者アートはさまざまなプロセスを経て変遷しながら、少しづつ認知され、社会に新しい価値観を生み出してきました。美術教育や知識によらず創造性の源泉からほどばしる真に自発的な表現、を意味するアール・ブリュット（生の芸術）の概念はひろく知られるようになりました。アール・ブリュット＝障害者アートではないものの、そこでは障害のある人の作品が数多く取り上げられ世界的な評価を受ける方もいます。

かつて2012年からの3年間、埼玉県障害者アート企画展（ディレクターとして県内の各施設を巡り、さらに施設に属さずに自宅で制作している方を訪ねるなどして表現活動調査を行ないました。そこで目にすることができた膨大な数の作品はまさに玉石混交。障害者の表現活動が有する幅の広さと深さを思い知らされました。人材育成とネットワークの構築を目指して福祉施設スタッフや学生らを対象にワークショップも行ないました。そのかつてのワークショップのメンバーが、この展覧会でスタッフとして参画してくれていることを嬉しく思います。

障害者にとってアートとは？表現とは？福祉とは？そんな問い合わせを包括する今回の展覧会。埼玉県全域からセレ

クトされ83人のアーティストによる561点の衝撃的な作品が展示されました。新たに発掘された驚くような作家。長年ずっと描き続けている作家の深まり。また時を経て独特な変化を遂げた作家。アートと福祉、それから他の目線が交錯し越境し、新しい視野が浮かび上がります。スクリブルあり、フィギュアあり、綿密な写実、執拗な点描、行為性を積み重ねたもの。——どの作品も、障害があるのに、ではなく、障害があるからこそ生きるエネルギーに満ちています。じつに多種多様であります。それが一人ひとりの切実な必要性から生まれてきたものだということです。人間が表現することの原点が、ここにあります。



来場者に配布した作家紹介と
出展作品を収録した作品集が
発行されました。

埼玉県障害者アートフェスティバル
実行委員会 発行

いきたいと存じます。また、ゆくゆくはこの企画展が、障害があつても地域社会で普通の暮らしを実現するノーマライゼーションの実現につながつていくものと信じております。

さて、第1回障害者アート企画展の時に、「僕は絵を描くようになつて人に優しくなつた。我慢することができない」と語ってくれた作者がいました。その言葉はまさに人々がアートによって優しく生活出来るといふことを証明しているように思つてます。それは描く人たちだけではありません。作品を見る人にとっても、作品にあらわされた色彩や形が、作者の声として見る人の感情に語りかけ、優しい気持ちが生まれてくるのです。彼らの作品には一見何を表しているのか分からぬ作品もありますが、その筆遣いの痕跡や描かれた内容から意味をさぐり、そして作者の思いを感じ取ることができます。それは、表現することで生きることを純粋に重ね合わせ、まさに生きるために表現し、表現することで生きている姿が彼らにあるからなのでしょう。本展覧会はそのようなお互いの「生きる」を感じさせる展覧会だと思ひます。

アートネットワークTAMAP主催、アートネットワークTAMAP主催の講習会がようやく実を結び、本年、民間の団体がんできた展覧会づくりのワークショッピングセミナーなどの講習会がようやく実を結び、本年、民間の団体が厚生労働省の助成を受けて主催する初の取組となつたのです。アートを通して障害者の自立支援を目指している障害者アートフェスティバル実行委員会としては、このような動きは誠に喜ばしい出来事です。これから先、行政と民間との協働で障害者アートフェスティバルの更なる可能性を追い求めて

第一回障害者アート企画展が

2009年に開催され、障害者の自立

支援を目指し障害者アートの可能性を

追求してきたこの展覧会は、7年目の

今年、展覧会の主催者が埼玉県障害者

埼玉県障害者アートフェスティバル 実行委員長 三澤一実



3ヶ所同時開催展

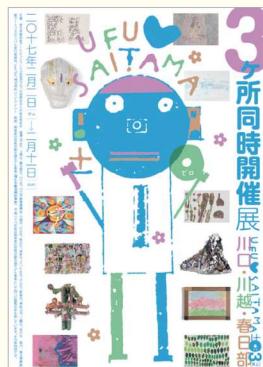
UFU SAITAMA 土 ^ト_ト^ロ ³(参上)展

— 1年の集大成として活動を地域に拡散 —

2017.2.2~2.11 @川口市・川越市・春日部市



障害者アート企画展の出展作家に新しい作家 13名を加え、さらに各会場に合わせて作品も一部選び直し、3ヶ所合わせ 95名の600点を超える作品を展示しました。



工房集では、ちょっとディープな作品を集めて紹介。後援会が運営するカフェで寛いだり、平日は併設のアトリエを見学したりしながら、じっくり作品と向き合える会場になりました。来場者の感想は→ P 79
出展作家 15名、来場者 329人(アトリエ見学ツアーバス 20名、カフェ利用 124人)

《南部地域》
@川口市・工房集



出展作家 63名、来場者 1147人

にて開催。広い会場に、未来を担う新進作家からベテランまでの多彩な作品を集め、埼玉県の障害者アートの層の厚さ、作品の幅広さや奥深さを紹介しました。

障害者アートと知らずに立ち寄る人や、外国人観光客なども多く、出口では「面白かった」「驚きました」といった声が多く聞かれ、日を改めて見に来てくれる人もいました。年齢層も幅広く、特に年配の人が時間をかけて鑑賞を楽しんでいました。

出展作家
95名

来場者合計
1844人

《西北地域》
@川越市・川越市立美術館

川越市立美術館内市民ギャラリーにて開催。広い会場に、未来を担う新進作家からベテランまでの多彩な作品を集め、埼玉県の障害者アートの層の厚さ、作品の幅広さや奥深さを紹介しました。

初の本格的な作品展となる新しいカフェ空間に合わせ、明るくポップな作品を集めました。カフェや併設の福祉施設で働く人たちも、作家と一緒に展示や会場の雰囲気、来場者の反応を感じることができ、カフェの運営自体も盛り上りました。

また、アーティストトークでも作家の個性が際立ち、温かく楽しいイベントになりました。



出展作家 18名、来場者 368人(カフェ利用 227人)

《東部地域》
@春日部市・多機能型事業所わっくす
喫茶「ゆめいろ」

アートセンター集 報告書 2016-17



アーティストトーク

より深く、見つめるために

作家の輝きが、社会を変える

作家が来場者の前で作品について語る
アーティストトークには、3ヶ所で延べ25
名もの作家が参加しました。

初めて挑んだ作家12名も、作品に込めた
想いを自らの言葉で語り、または、創作の
様子や作品が生まれたエピソードを説明す
る家族や施設職員の隣に立ち、みない表
情を見せていました。来場者からの質問も
多く、「どんな時に描いたの」「何でその
モチーフにしたの」といった質問の答えに
も、作家の個性があらわっていました。ま
た、「ファンなので会えてうれしい」「一番
好きな作品です」といった熱いメッセージ
も多く、照れながらうれしそうにする作家
の表情に、みんなが笑顔になり、会場が温
かな雰囲気に包まれていました。

作品を介しての様々な交流が、作家と表
現を育み、またその変化が、支援者や周囲
の意識にも様々な変化をもたらしています。



語り、つながり、あふれる想い

齋藤進さん（わっくす）

一言いえば、張り合いかある。世の中には、天使の絵を描く自分のような人間がないおかしくないのかな、と思つてもらひえれば。人前に立つのは苦手で、これまでの六十数年間ほとんど経験がなかつたが、もつと自分の絵について厳しい意見も言つてもそのことを忘れないようにして、また、わたしあたたかうつて、それを足掛かりにしてまた絵を描いていきたい気持ちだ。

黒川文子さん

トークイベントに参加して、社会のみなさんへの気持ちの持ち方が変わったよう思います。会場にいたみなさんが、わたしのこともあたたかく受け入れてくださって

永井健雄さん（光の園）

初の参加でしたが、堂々と大勢の前で作品について説明していました。「こんな乗り物が未来にあつたらいいなと思つて描きました」と話し、

野村真優子さん（ゆめたまご）

真優子さんは紐を何度も結んだものを制作していますが、彼女にはこれが作品であるという意識はありません。

横山涼さん（工房集）

トーキーに参加したのは、日々作品に対する思いが伝わってきて感動し、その姿はアーティストそのもので誇らしかつたです。次の日、担当職員に「昨日、自分は立派でした」と報告したそうです。この経験はとても大きな自信となり、次の作品にも意欲的に取り組んでいます。次は発泡スチロールで立体の美女を作

るそうです。



壁面に展示した
様々な素材の様々な結びを
制作した野村さん（右）
言葉では語らないがうれしそう



展覧会を重ねるうちに尖った毒々しい作品から
ユニークな創作へと作風が大きく変化した

2月5日曜日に川越美術館に行きアーティストトークをしました。たくさん的人が観に来てすぐかったです。自分の発表は最後でしたが、うまく発表できました。発表を終えて自分の作品の「ビックホーム」をいろんなところから「デジカメで撮ったり、電気をつけたり、消したりしました。あと、白田君や高谷さんの作品、大串さんの作品も撮りました。今度また機会があれば行きたいです。

西川泰弘さん（工房集）



作品をたくさんの人見てもらいたい
話をしたいという想いがトークにもあふれていた



展覧会への出展を重ね両親の意識にも変化
当初は紙袋で搬入していたが、
作品として大切に扱うようになった

トークイベントは過去にいろいろなところでして、いたので、今回も緊張せずに話すことができました。絵画活動をしている気分やはじめたきっかけの話しをしました。またその他にホームでの生活の様子も伝えました。作品展でアーティストトークイベントをする障害者アートは、華やかな感覚を持ち、魅力的に感じます。これからも絵画活動を頑張ります。

私は大人の塗り絵教室をやっていますが、生徒には自由に塗らせています。自分が持っている色彩感覚を感じられるようになることで絵画が好きになるのです。

今一般の方は現代社会が抱えているストレス、本質的な根本を忘れている生活にあきあきしていると思います。そういう中で、私は一般の方たちにもわかる美しい色彩の絵を中心に描いています。



石井章さん

なお丸さん

埼玉県生まれで良かつた。

埼玉県障害者アート展に参加

することで、僕の人生はラッキーの連続です。色々な人に知りあえて、認められて、

広がっていきました。アートセンター集主催の障害者アートマネージメントセミナーで

「作品作りは、仕事になるのでしょうか？」と質問したところ、4人の先生方から真剣

にアドバイスをいただきました。川越市立美術館でのアーティストトークの場に立ち人前で話す経験ができました。これからも作品作りを頑張つて行きます。

作家LIVE episode 1

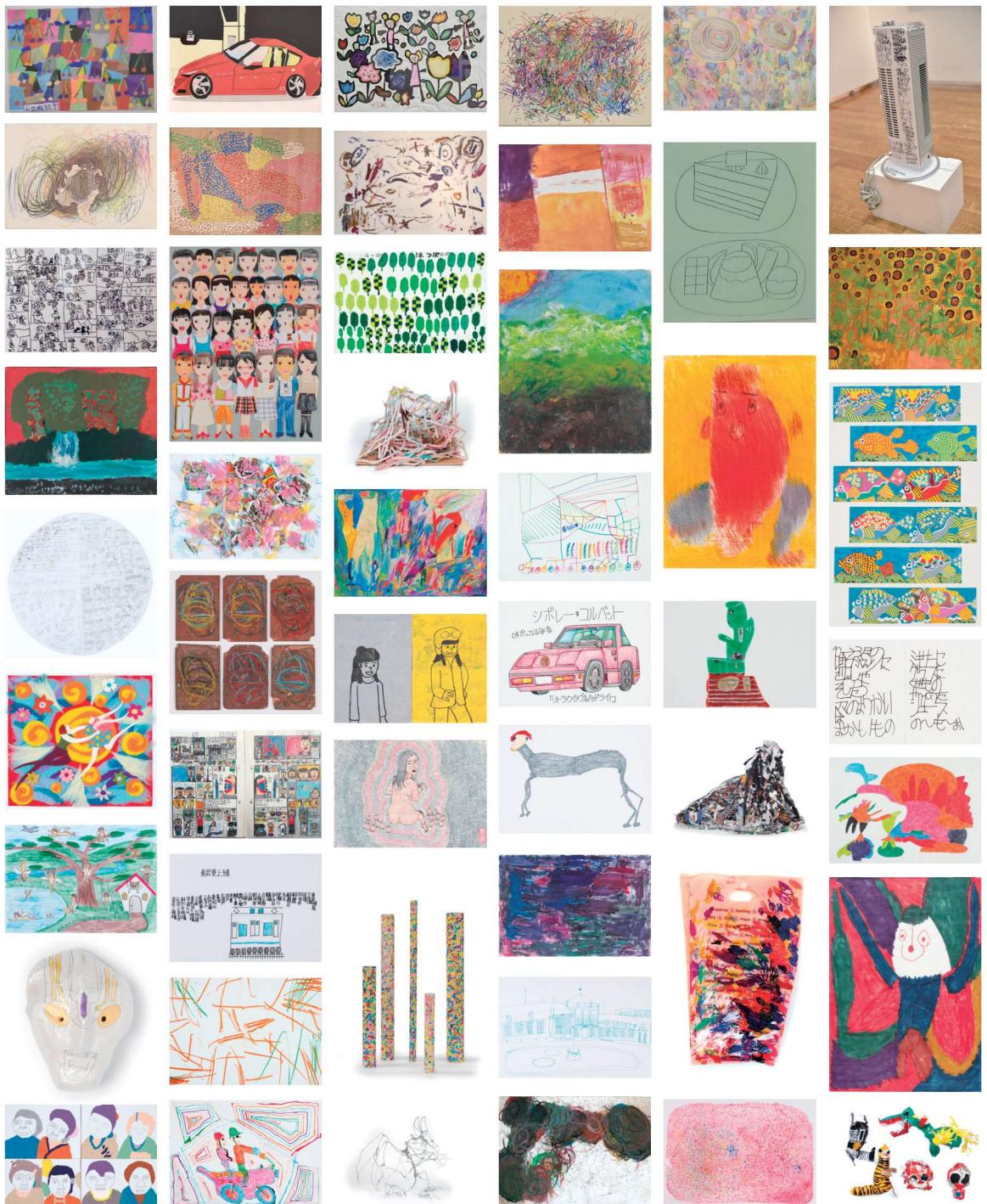
突然、似顔絵バトル？!

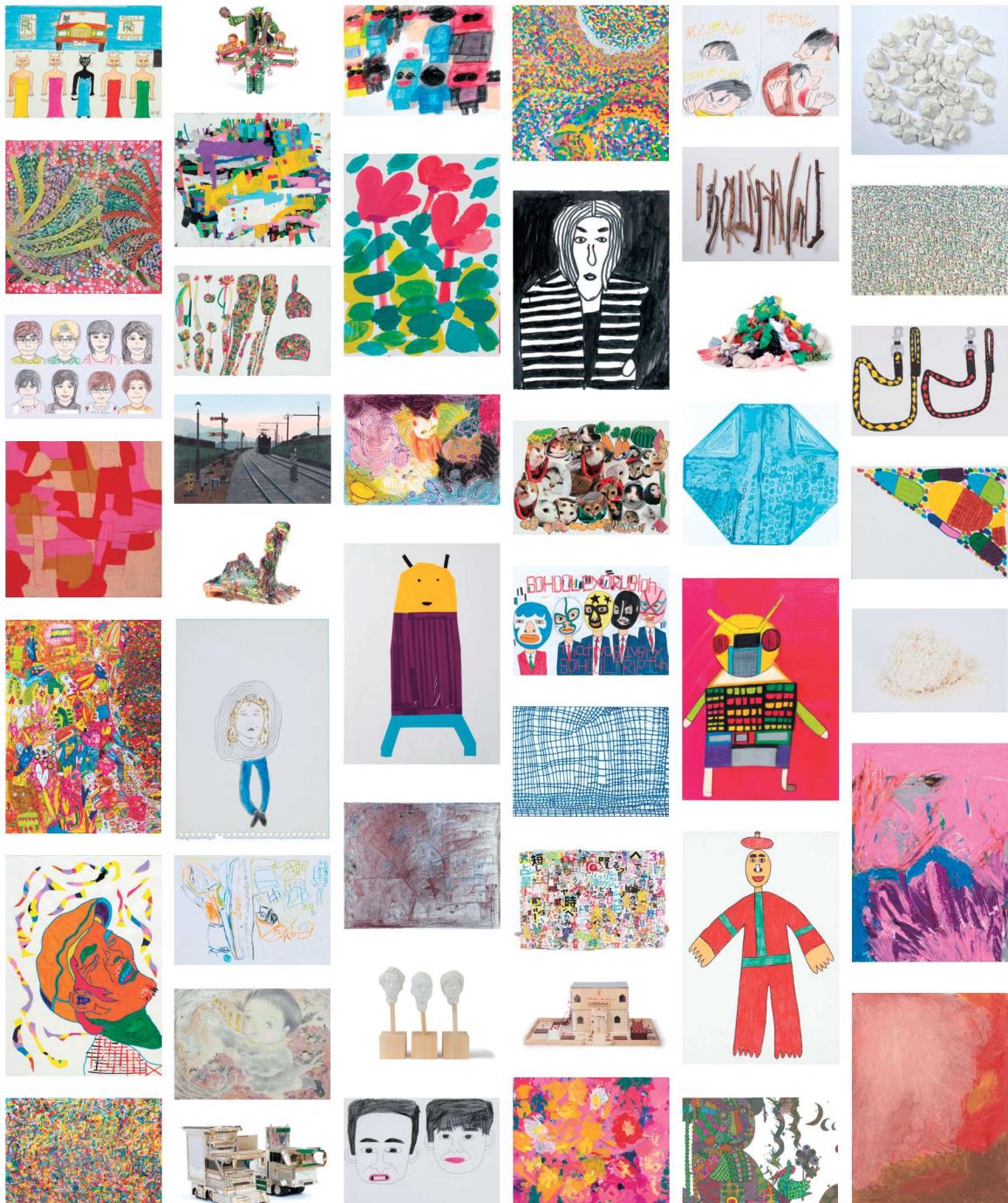
たくさんの似顔絵を出展した都築敬昌さん。即興で似顔絵を披露した。トークでは話さず歩き回っていたが、集中してパッとモデルの特徴を捉え、もの凄い勢いで描き上げた。するとモデルの高松由紀子さんも「お礼ね」と、都築さんをササッと描いてみせた。突然の二人の競作と笑顔にみんなもにつくり。



ぜひ、埼玉県が誇る！
個性豊かな表現と作家に
会いに来て下さい UFU♡

埼玉から未来へ輝きを放つ 96人の作家たち





【出展作家一覧】 西川泰弘 佐々木孝志 高橋裕子 東野将大 石井章 ベイビーズ・ブレス 山内功次 杉山良介 熊倉美優 平田佳宏 金谷ゆり 萩原徹 古澤美紀 下山肇 佐々木拓也 さとちゃん 宮原裕美 白田直紀 マスカラ・コントラ・マスカラ 前田聰男 椎橋豊 なお丸 原口めぐみ 川田修 横井雅美 前田貴 大串憲嗣 箭内裕樹 高谷こずえ 黒川文子 小幡海知生 福島尚 佐々木慎一 鳥羽直弥 曾我部竜弥 嶋田怜真 邑月寛 小林春介 石井陸渡 永井健雄 横山涼 神田泰宏 関口広史 佐藤こはる 加藤朋大 小林ちゃん 安田英明 シュウシュウ 後藤友康 高橋創 野本竜士 斎藤勇真 今村明義 田中貴之 須田法子 すずきょうた 三好進 納田裕加 野口敏久 豊島則幸 山田麻紀子 佐藤祐一 森川里緒奈 風間博 尾ヶ井保秋 ユキウサギ 真由美 吉田大将 斎藤健視 鈴木めぐみ 田中悠紀 賀戸綾子 小田中浩美 EMI 小林力オル 柴可南子 阿部香織 能崎由貴子 平川寛隆 新井貴道 斎藤進 栗原和秀 高松由紀子 大倉史子 野田勇人 三浦元史 柴田和 ヤマダジュンヤ 都築敬昌 武石トシ子 梅澤勝典 福島香織 八島遼 内藤みひ 野村真優子 Over 作品・作家名とも順不同



作品化の実践 TAMAP+○メンバー感想

作品化の実践→作品展×3+A-アーティストトーク×31

■作品展による作家やその周囲の変化

- ・自分の作品が展示されているのを見た作家が、数か月描いていなかつたのに次日から描き始めた。
- ・自分の作品がなかつた作家も、しばらくすると、気になる作品をじっくり見ていた。

- ・今まで作品を見る事が少なかつた利用者も、気になる作品をじつと見つめていた。
- ・作家から「イベント会場などで他の障害の当事者と交流できるのが楽しい」との感想が聞かれた。

- ・認知の難しい作家が、自分の作品をしつかり認知し、反応するようになつた。
- ・作家が、展示やパフォーマンスを通して活動範囲が広がり、自信をつけていっている。本人だけでなく、家族の自信にもつながつていて、家族が施設の活動や交流の場に積極的に参加するようになつた。

■各施設等内部の変化

- ・これまで作品展を見に来なかつた職員も興味を持つて来てくれた。
- ・表現活動に関わっていない利用者も含め、大勢で一緒に見に行くことができた。
- ・昨年はまったく来なかつた施設から、2日間で2グループが来てくれた。

- ・3回目の参加だが、年々みんなを大切にするような空気が施設の中で生まれている。
- ・職員で額作りをしたのは、大変だったが団結できた。

■定例研修会について

- ・他法人の職員と繰り返し顔を合わせる中で少しづつ展覧会の運営に必要な団結力やチームワークが育まれたような気がする。

- ・毎月集まり話し合ううちに少しづつわからないことや知らないことが見えるようになってきて楽しかった。

- ・企画展の名前を決める作業などで、全體共有ができるよかったです。
- ・専門家の視点は自分の知らない世界を知ることに等しいと感じた。多くの福祉職員に体験してもらうことでも地域福祉力向上に寄与すると思う。

■作品選考について

- ・平等な選考だったと感じた。

- ・施設の一職員も専門家も一緒になつて感性を働かせて選考に携わり、納得のいくものになつたと思う。

- ・年々厳しくなつていて、それでも同じ作家が多く、同じ作品が散見された。その点は、全体で考慮する必要があると感じた。

- ・「上手な人」が選ばれていると感じた。「芸術は爆発だ!」のようなアグレッシブな表現の作品も選出されたらと思つ。
- ・表現活動状況調査票に作品が生まれた背景を記入できれば、より作家の想いが伝わり選考の参考になると思う。

- ・広報チラシを作り取組めばよいのではないか。

■展覧会準備について

- ・展示の仕方など詳しく述べてもらうと、施設での展示でも活かせると思つた。

- ・設営の後に作品や作者の情報を共有できることで、来場者に質問された時に説明することができ良かった。

- ・各施設が市に後援依頼をすることで、これまでには施設内の一活動に留まつていながら、少し違つた意識で企画展に取り組めた。市内の関係施設や職員、来館者にも周知を図ることができた。

■展覧会について

- ・たくさんの作家やその家族が来場していた。

- ・会場のスタッフがどの作家についても答えることを評価してくれる人もいた。

- ・鑑賞マナーなどの取り決めは、一般的なルールを基準にしながらも、ある程度寛容な空気感も保つていなければ障害者アートの企画展としては不自然だと思つた。一般的な枠にはまり難い人たちの表現の披露の場では、作品（権利も含めて）を守るということを除いては、ある程度内包されて良いと思う。

- ・異動等で障害者アート支援から離れてしまつて、いる職員が、個人的にTAMAP+○に関わる仕組みもあるといふ。

- ・異動等で企画メンバーの交代があつて、クオリティーが変わらずに運営に入つていただける工夫も必要。

- ・内部の職員間の感性（アート支援への熱意など）の足並みを揃えていくことの難しさを感じる。

- ・出展作家に、企画展の報告を具体的にできたらいいと思う。来場者が作品を見てどう感じたかななど伝えることで、モチベーションが上がると思う。

- ・新聞、テレビ、自治体広報への宣伝不足が反省点。

■活動全般について

- ・決定したことの説明を受けて動いていくことが多く、全体で考え作り上げたという印象が薄い。今後は企画・運営段階で他の施設も関わることを考えたらい

- ・全体で集まるとき發言する時間が少なくなる。各支部の少人数で進めることも一考では。

- ・参加団体が多くなり、各施設の意向が通りづらい印象を受けた。支部をどう運営するのかが、今後の課題の一つ。

- ・メンバーがいない市町村へ勧誘活動をし、支部会が開催されたりすれば面白いことになりそうな気がする。

- ・異動等で障害者アート支援から離れて、いる職員が、個人的にTAMAP+○に関わる仕組みもあるといふ。

- ・内部の職員間の感性（アート支援への熱意など）の足並みを揃えていくことの難しさを感じる。

- ・出展作家に、企画展の報告を具体的にできたらいいと思う。来場者が作品を見てどう感じたかななど伝えることで、モチベーションが上がると思う。

- ・新聞、テレビ、自治体広報への宣伝不足が反省点。

- ・広報チラシを作り取組めばよいのではないか。